

派遣者番号	R2K24	氏名	岸田 大輔
研究主題 —副主題—	知的障害特別支援学校高等部における不登校支援に関する研究 —「不登校生徒等アセスメント・支援シート」の開発—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	奥住 秀之
所属	都立水元小合学園	所属長	篠崎 友誉

キーワード：不登校 知的障害特別支援学校高等部 アセスメント・支援シート

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

文部科学省が毎年実施している「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、小・中学校の不登校児童・生徒は増加しており、憂慮すべき状況にある。特別支援学校においても同様の状況が考えられるが、調査対象となっていないため、不登校に関する実態等を把握することができていない。特別支援学校においても同様の調査を行い、不登校児童・生徒の実態、支援体制や方法等を明らかにし、不登校の組織的な予防と支援に役立つ知見を蓄積していくことが求められている。

そこで本研究では、知的障害特別支援学校高等部の不登校生徒等の実態や具体的な支援について調査し、組織的支援を行っていくために必要な情報共有を行う特別支援学校の特徴を踏まえたツールとして「不登校生徒等アセスメント・支援シート」の開発を目的とした。

2 研究の方法

(1) 研究の流れ

図1に示したとおり検討1～3の調査を基に、検討4・5を実施する要領で進めた。

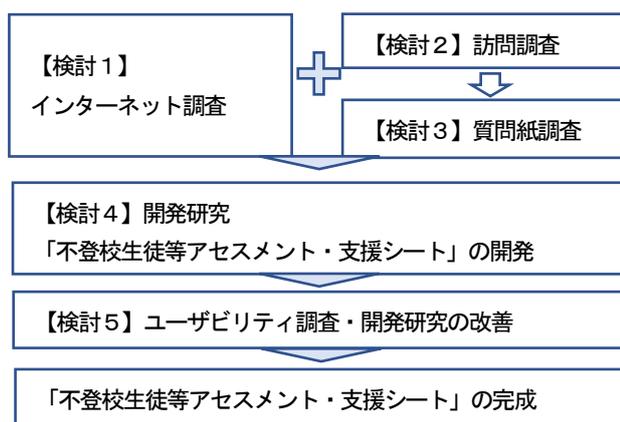


図1 研究の流れ

(2) 【検討1】 インターネット調査

全国の不登校支援に関する取組を概観することで、開発研究の手だてとするため、47の都道府県教育委員会と、20の政令指定市教育委員会のホームページを閲覧し、情報を収集した。

結果として、文部科学省から出されている、「児

童・生徒理解・支援シート」を含む、不登校支援のためのアセスメントシート等を14件収集することができた。収集したシートを分類、整理することで、多くのシートで共通する項目が得られた。

(3) 【検討2】 訪問調査

特別支援学校高等部職業学科の不登校の現状と支援について把握をするため、都立特別支援学校の就業技術科5校と職能開発科3校を訪問し、半構造化面接法によるインタビューを実施した。

その結果、各学校の現状や特徴的な取組、今後検討している計画等を把握できた。不登校の原因の一つとして、家庭支援の有無の影響が大きい。組織的な支援として、前籍校との引継など外部機関との連携が重要であると考察した。

(4) 【検討3】 質問紙調査

知的障害特別支援学校高等部の不登校の現状と支援について把握をするため、都立特別支援学校で知的障害高等部を設置している28校に対してMicrosoft Formsを活用した質問紙調査を実施した。23校（回収率82.1%）より回答があった。

その結果、不登校生徒等が在籍している学校は9割を超え、対応に課題を感じていることや必ずしも組織的な対応ができていない状況等が分かった。組織的な対応とそのため生徒情報を共有するツール等の必要性、重要性が示唆された。

(5) 【検討4】 開発研究

知的障害特別支援学校高等部で活用できるアセスメント・支援シートを、検討1～3で得られた知見と東京都教育委員会が作成した「登校支援シート」を基にして開発した。

その結果、障害名や障害者手帳の記入欄を設けるなど既存のアセスメントシート等にはあまり見られないシートの開発ができた。

(6) 【検討5】 ユーザビリティ調査・改善

開発したシートのユーザビリティ調査を行い有効性や操作性等の評価から改善を図るため、知的障害特別支援学校高等部に勤務する3名の教員に評価を依頼し、実施した。

その結果、多くの項目について重要性が高いと

評価を受ける一方、文字が小さい等の改善点も挙げられ、項目の精選や配置の変更、記入例の縮小などの検討が示唆された。

3 研究の結果

検討を経て、図2、図3に示したとおり「不登校生徒等アセスメント・支援シート」が完成した。全体の分量は、A4用紙1枚裏表までとし、シートの表面では、生徒の基本的な情報など全体像を把握し、裏面には、目標や生徒本人を取り巻く周囲の環境、支援の手だてを共有、検討できるようにした。

不登校生徒等アセスメント・支援シート										作成・更新日 令和●●月●日				
フリガナ	ミズノ タロウ	性別	男	生年月日/年齢	平成15年12月24日 17歳	障害名	知的障害	知的障害	自閉スペクトラム障害	障害性学習障害				
氏名	水元 太郎	学年・級	2年 3組	愛の手帳	無	申請したが、取得できなかった。								
住所	高松区	担任名	小合	身体障害者手帳	無	申請のために通院している。								
欠席(不登校)などの主な理由	家庭環境、家庭支援の少なさ。障害受容ができていないため、本人にとって不本意な入学になっている。													
現在の状況	<ul style="list-style-type: none"> 本校に入学したが、当初のイメージとのギャップがあり、中学校時代の友人の影響もあり普通高校に気持ちが向いている。1年の途中から学校にほとんど登校しなくなった。 家庭の支援も少なく、学校に送迎してもらえない。 													
月	令和2(2020)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
出席すべき日数	19.8	16	16	19										51
出席日数	10.0	4	1	2										7
欠席日数	9.8	12	15	17										44
遅刻	7.0	3	1	2										6
早退	3.0	1	0	0										1
現在の状況・様子	<ul style="list-style-type: none"> 睡眠 ○睡眠不足である 食事・運動 ○朝食をとらないことがある 疾患 ○疲れや体のだるさがある コミュニケーション ○コミュニケーションが苦手である 学習 ○文字を書く、写すことが苦手である 情緒 ○人と関わることが苦手である 社会性 ○人と関わるのが苦手である 生活期との関係 ○学校になじめない 													
備考	パソコンは得意、パソコンの資格には興味がある。 WISC-IV FSIQ 106 VCI 91 PRI 120 WMI 89 PSI 115 現在の状況・様子の割合 ● 身体・健康面 ● 心理面 ● 社会・環境面													

図2 不登校生徒等アセスメント・支援シート (表面)【記入例有】

目標 (短期・中期・長期)	前期中に 就業体験に参加する	前期中に 個別面談を行う	後期から 週2回、登校する
本人の思い・希望 卒業後のイメージ等	普通高校への憧れがある		
エコマップ(ジェノグラム)			
前職校	医療機関(病院・診療所)	保護者(家庭)の状況・考え・希望	
支援内容	○病院 担当○の医師 相談なし	主治医もいない、医療との連携はない。	本校を卒業し就職できたらよいと思っている。
子供家庭支援センター	担当 山田さん		
支援内容	○保護者への支援で活用したことがある		
支援内容	○母子家庭 ○保護者(家庭)への支援が必要である ○家庭が経済的な厳しさを抱えている		
支援内容	○担任による声掛け・相談 ○担任以外の教員の声掛け・相談 ○外部専門家(心理士、スクールソーシャルワーカー)による相談		
支援内容	○電話連絡(定期的なもの) ○学校携帯電話を活用したメール連絡 ○個別面談(本人・保護者) *将来や進路について相談する		
支援内容	○人関係改善のための指導 ○教員との関係改善 ○家族間の関係調整		
支援内容	○本人の興味・関心の高い授業や行事等への登校を促す ○生徒を促すに自宅又は最寄り駅・バス停等で待ち合わせ登校を促す		
支援内容	○関心に応じた指導、授業方法の改善、分が易い授業の工夫		
支援内容	○パソコン 検定について説明し、受験を促す		
特記事項	今後は外部専門員の活用と、外部関係機関(医療機関)との連携を図っていく。個別面談前にもう一度関係者で支援の方向性を確認する。		

図3 不登校生徒等アセスメント・支援シート (裏面)【記入例有】

4 研究の考察

完成したシートは、個人情報管理の観点から複数枚にならないようにA4用紙1枚裏表までとした。障害名や障害者手帳の記入欄など特別支援の要素を取り入れることと家庭環境等を重視し、エコマップ(ジェノグラム)などで情報を可視化した。また、作成者の負担軽減を図るために、表計算ソフトのプルダウン機能を多用し、入力時間の短縮や生徒の実態把握の観点につながる工夫を行った。さらに、コメント挿入やデータの入力規則機能を活用することで、別紙のマニュアル等を読まなくても容易に作成できるようにした。

組織的な支援を行っていく第一歩として、教員間の円滑な情報共有に資するツールになると考える。

5 今後の展望

開発した「不登校生徒等アセスメント・支援シート」の学校現場での実用性を検証し、更に改良を重ねていくことと、具体的な活用場面や活用方法について検討し、提案していくことが必要であると考えている。